丹後山地とその周辺におけるイラカザトウムシとオオナミザトウムシの核型の地理的分化

○鶴崎展巨・岸田紀子・石田龍平（鳥取大・地域）

　兵庫県と京都府の県境にまたがる丹後山地とその周辺はザトウムシ類の染色体数分化のホットスポットで5種のザトウムシ（アカサビ，ヒコナミ，オオナミ，サトウナミ，イラカ）で染色体数の地理的分化がみられる。それらのうちイラカザトウムシ*Gagrellopsis nodulifera*とオオナミザトウムシ*Nelima genufusca* の2種で染色体分化の地理的パターンを調べた。イラカの染色体数は兵庫県内のみで2n = 14から24まで交雑帯を形成しながら連続的に分化しており，京都府側の丹後山地内でも染色体数の分化が期待されたが，丹後山地内では調査した7地点すべて2n = 14であった。しかし核型は少なくとも2タイプが区別された。由良川より東の長老山では2n = 16に変化していた。オオナミは丹後山地内では概ね2n = 18であるが，由良川右岸の2n = 20へ移行する2n = 18/19/20の多型と考えられる集団が由良川下流部左岸から天の橋立付近にみられた。ただし2n = 20で単型の集団は由良川左岸では見つかっていない。核型分析により2n = 20から18への移行はロバートソン型変異で生じたと推定された。